

平成 29 年度 第 1 回 関西観光・文化振興計画検討委員会 摘録

平成 29 年 5 月 29 日(金) 13:00～15:00

関西広域連合本部事務局 大会議室

(あいさつ)

古川局長：拡大し続けるインバウンド市場に対応していくため、また、文化庁の本格移転、ラグビーワールドカップ等、インパクトのある事業が重なってくることを踏まえ、振興計画の見直しを進めていくので、ご意見をお願いします。

なお、国の法整備を踏まえて I R の研究会についても再開に向けて動き出しており、その議論も計画に反映させていきたい。

(各委員からの意見)

河内委員：西国三十三所巡りが始まって 1300 年目を迎えることから、能や歌舞伎、浄瑠璃の舞台になった場所を選んで、21 世紀の三十三所を巡礼コースとしてとりまとめ、冊子を英語併記で作成した。各自治体、企業等と協力して、2020 年までにこのコースが知られるようにしていきたい。

この、ものがたり街道三十三所巡礼を広めるのに大事な仕事が、若手プロデューサーの発掘である、と考えており、広域連合や各自治体と協力して進めていきたい。

橋爪委員：いくつかの柱の組み直しが課題だと思う。

従来抜けている視点がある。1 点目は、技術への対応。文化や観光においても、通信や IOT、ビッグデータの活用など技術的な新しいアイデアを取り入れながら、地域ごとに企業や大学との連携を考えていくことが重要である。

2 点目は、レガシー。2021 年までこの計画を進めた後に、関西に残すものは何かという視点。文化財の利活用事例など、新しい使い方が磨かれたということでも良い。空港と鉄道、舟運との連携も、まだまだ可能性がある。様々な試みによって新しい観光が生まれ、それが次世代に残すレガシーだと言えると良い。

3 点目は、節目の設定。2020 年は、大阪万博から 50 年、鶴見花博から 30 年。阪神淡路の震災から 25 年。2020 年は、東京オリンピック・パラリンピックの年次というだけではなく、関西独自の節目の年として、意味付けることが必要だと思う。

4 点目は、緊急事態への対応。従来はなかった新しいタイプのビジネスモデルに対応できるようなプログラムが計画にビルトインされていると良い。テロ対策などの視点も不可欠である。

推進方策ばかりではなく、バルセロナでホテルの数をコントロールしているよう

に、観光で地域をマネジメントしていく視点も加味して柱立てを考える。

廣岡委員：現在の計画はいずれの項目も推進していくべきであるが、具体的な踏み込みがない。各府県、市町村、企業、大学はどのように計画を進めるのか、国の機関に頼ることはあるのか、各項目でそれらの関係を示す必要がある。

人材育成についても、広域連合と府県、市町村、大学がどのような協力をするのか、また、どういう人材を求めているのかを示すべき。

塩見委員：計画はよくまとめられているが、あえて言えば、もう少し経済効果が高い人に来てもらえるよう施策をシフトする。1. 閑散期を埋める方、2. 消費単価、時間単価が高い方など。一方、受入側も、例えば、世界遺産姫路城の入城料は世界的な価値に比べて安く、もっと付加価値を乗せ、消費単価を上げることができる。

もう一点大きなポイントは、観光人材の育成。観光産業の社会的地位がまだまだ高くないという課題感があり、よい人材を集めるにも観光には社会的意義があることを伝えていく必要がある。観光おもてなしは、リアルなふれあい・交流であり、やりがいもある。業界としても取り組んでいるところである。

それから、文化振興、理解促進の面では、「旅館」の活用である。畳の部屋、布団、浴衣、伝統的な和食、日本庭園など、凝縮した日本文化をワンパッケージで体験できる宿泊施設であることを、もっとアピールする必要があると思う。

事務局：人材育成の手法についてご意見をいただきたい。

橋爪委員：一定の業務が出来る人たちを育てるだけでなく、規格外、枠にはまらないようなプロデューサーが必要。IRの開業に向けて、また国家的なイベントへの対応も含めて、次世代を担うクリエイター、プロデューサーなど、従来なかった新しい人を育てたい。活躍の場を用意することに尽きると思う。

2点目としては、育成の場所。各地でテストイングし、ベストプラクティス、すなわち成功事例を広めていくなかで人材育成が加わってくるのが良い。兵庫県の篠山の歴史的建造物をホテルに活用する試みや、新しいタイプの宿坊をつくるビジネスモデルを関西全域に広めていくなかで新しい人材が出来てくるという状況をつくりたい。成功事例、各地で実践されているノウハウは関西全域で共有すべきである。

それから観光文化分野に投資し、産業育成をはかる施策を重点化すべきだと思う。産業振興には雇用が伴う。産業振興と人材育成は同時進行するはず。ニーズがあるから人が要る、新しい人材には教育が必要、というサイクルが見えてくる。

河内委員：多くのお寺がある大阪市の上町台地に、体験型の宿坊が出来ており、成果が出てくると思う。宿坊の体験による観光の成功例をアピールすると、だいぶ風穴が開けられる。

また、区レベルでの案内ガイド養成など、いろいろな芽が出てきており、広域連合で情報をすくい上げ、2020年に向けたイベントの中にこれらの人材をうまく組み込んでいけば事業化しやすいと思う。

保科次長 観光学部の就職先、旅行会社に勤めている人の出身学部を教えてください。

廣岡委員 観光学部・学科は全国で50ほどあるが、観光関係の企業に行くのは20%以下。銀行と観光関係から内定が出た場合、勤務条件を考えて銀行に行ってしまう者が多い。ただし、旅館などは銀行に頼らなければならないところもあるので、観光の実情がわかるものが銀行に増えるのはいいと思う。

また、観光業界でも、経営者となるには、ファイナンス等の知識が重要であるが、そういう観点の人は少なかった。観光を知っている人間が銀行に勤め、観光業界にそういった観点の人間が出てくることで人材は育っていくと思う。

今後、観光学部の卒業生が社会の意思決定ができるような立場になれば、人材を育成しやすい環境が生まれてくるのではないか。

橋爪委員：観光や料飲の現場で業績をだした人が、経営について勉強できる大学がセカンドキャリア向けに必要だと思う。そこそこの規模のレストランを経営している、マネジメントを全く専門的に勉強していなかったシェフが、2年間だけ経営を学ぶ高度な専門大学院が、スローフードの発祥の地であるイタリアのブラやスペインのサン・セバスチャンなどには出来ている。

塩見委員：私の社内では、地域に入って観光開発に携わり、そこならでの資源を地域の方と一緒に磨き、発信、流通させることで、お客様や地域の方に喜んでいただき、そして我々も利益があるような三方よしのビジネスをつくっていくDMP（ディステイネーション・マネジメント・プロデューサー）を全国で育成して、憧れの存在になっていくような社内文化づくりをしているところ。また、エリアの経営人財（シニアプロデューサー）育成も必要だと認識している。これまでの旅行業ビジネスは、お客様を送り出して終わりというような発視点のビジネスだったが、今は、来ていただいてお金を落として頂きそれを事業化していくビジネス発想に変わりつつある。

古川局長：振興計画の修正等をしていく中でご意見を賜りたいのが、各地のDMOをどうしていくのかという課題。それから、文化と観光の2つの柱融合についてもご意見をいただきたい。

また、観光は、多くの方にきていただくのが目的化している部分があったが、一つの産業分野、経済分野になってきていると思うので、仕掛け方についてご意見をいただきたい。

廣岡委員：観光客を何人集めるという目標設定を、そろそろ考え直す必要があるのではないかと。バルセロナのお話があったが、サステイナブル・ツーリズムの考え方で、適正な規模の観光客はどれだけか、それに対して、どのように質を高めていくのか、という視点での計画の立て方が求められるのではないかと考えている。

橋爪委員：ウーバー、エアビーアンドビー等、シェアリングエコノミーという新しいアイデアと、IT など技術面での発展、観光が融合して新しいビジネスが生まれている。

観光に関連するベンチャーを起こすためには、観光以外の業種をサポートして、投資することも考える必要がある。

宿坊の提案をしている会社のサポートをして広めていくなど、小さい資本の新しいアイデアをいかに育てていくのか、観光文化分野の産業化のインキュベーションをやっていかなければならない。

塩見委員：日本旅行業協会（JATA）では、旅には文化、交流、経済、健康、教育の5つの力があると提唱しており、文化と観光が別々に語られることに違和感があり、一体であると考えている。コーディネートする人材が重要。

河内委員：歌舞伎などで、外国人のために短時間で鑑賞できる演目が増えたり、文楽でも英語表示を入れて欲しいという要求が増えている。観光と文化の関わり合いで言えば、世界に知られる芸能になっていく段階で、分かりやすさを優先すると本物感が薄められるのはやむを得ないが、有難みもなくなりかねないところが難しい。

端的な成功例としては京都のギオンコーナーがある。関西でナイトライフをあるレベルの水準の芸能で埋めていくという仕掛けは、普通の劇場・ホールでも出来ると思う。

橋爪委員：神戸の居留地から京都の博覧会に来る外国人向けに、椅子席の劇場をつくり、伊勢の踊りを手本にした振付けを付けて始めたのが京都の都踊りの発祥。明治

期の産業振興のなかで、国際観光を意識してつくった。徳島の阿波踊りも、昔からある伝統的な踊りを、観光客に来てもらえる芸能に改めてきた。

我々は、絶えず文化と観光を意識しながら新しいものをつくってきているが、その自覚がないので、すぐに伝統的なものを守れという意見が出てくる。文化財保護と文化振興策の間をつなぐものが抜けていたが、今回、文化財を観光に活かす、とされたため、観光振興を触媒として、様々な挑戦的なことが生まれると期待している。

河内委員：全国の、有名な伝統的な芸能と思われているものは、殆ど近代以降、再編集してつくったものである。

廣岡委員：文化は保存、観光は経済優先という視点で見られてしまうことがあるが、両立するものなので、バランスのとり方をどう示していくのかが、文化観光の重要なところだと考える。

保科次長：文化財観光を文化庁が打ち出しており、守って、見せない、というところから、一步脱却しようとしている。それを更に進めるための御意見をいただきたい。

橋爪委員：観光ルートをもう一度考えることも必要。戦前には、スイスなど先進観光地のモデルを取り入れて、各地で河川や山岳を周遊する観光ルートができた。あるいは、皇陵巡拝、楠木正成・正行父子ゆかりの地をめぐるルートも、戦前は重要であった。

忘れられた観光周遊ルートの復興をはかるべきだ。新たな観光ルートも含めて、再ネットワーク化することもとても大事であり、いくつかのテーマで設定した歴史的な観光ルートを、世界に向けもう一度アピールすることが必要だと思う。

廣岡先生：美術館、博物館、資料館等は、公的なもの、個人的なもの、いろいろあるが、これをカテゴライズし、様々なジャンルで複層的に構成すると、それ自体が一つのコンソーシアムになり、共通入場券等の設定によって広域的に人を移動させると、あまり知られていない文化施設も掘り起こせるのではないか。手続き的な問題が生じてきた場合は、文化庁が関西に来れば、実際に見てもらいながら改革の必要性を示していける。

橋爪委員：従来なかったもの、忘れていたもの、評価されていないものがまだまだあるので、その開発を文化庁等と一緒に再評価するべき。大阪府には寺が多く、日本

庭園もかなりあるが、全然観光資源になっていない。従来評価されていない文化財をネットワーク化し、もっとアピールする。竹田城もあれほどウケるとは思わなかった。絶えず新しい価値、新しい魅力を発見してアピールしていくべき。

河内委員：大学博物館の活用は新しく、まだ 20 年にも満たないが、なかなかのものがあ、例えば、川西にある大阪青山短期大学のミュージアムは、建物は天守閣で、国宝を所蔵している。源氏発祥の地、川西の多田神社の源氏まつりとセットで売り出し始めている。

広域連合が、大学博物館の情報と効果的な使い方を発信すると、大学が多い関西らしい取組だと評価を得るのではないか。

塩見委員：モノからコトに変容する中、日本人の地域での日常生活そのものに対する関心が非常に高くなっている。例えば縮緬の機織りの音、打ち水の習慣、朝市、銭湯など、地域古来の生活文化を守っていくスタンスも重要である。

坂上委員：インバウンドという視点からの国際観光の比較で日本に抜けているものは、国を代表する博物館がないこと。関西から、本格的な日本がわかる博物館について提案すべきではないかと思っている。

また、観光税の問題が議論されていないが、関西で文化を守り観光とつないでいくためには、関西全体で観光税の考え方を普及させる運動をすべきではないか。

今まで、マーケティングが重要なテーマになっていたが、関西観光本部との住み分けをしていただき、方向性を示すのは連合、ビジネスにより近いところは観光本部という役割分担を明確にしていく方が良い。

橋爪委員：神戸市で、20 世紀博物館群構想とあって、スミソニアン日本版をつくるべく、梅棹先生や先生方と一緒に絵を描いていたことがある。震災のためプロジェクトそのものがなくなったが、歴史的な文化財だけでなく様々なテーマの日本を表現する博物館群を多様な主体によって集めようというのが当時の構想だった。インバウンドを意識して、日本を紹介する博物館群の構想を、もう一度、前に向けていただきたいと思う。

事務局：座長の選出は委員の互選となっているが、事務局から案をお示しする。検討委員会設置当初から委員に就任いただいております。観光をテーマに、産業、経済、文化、まちづくりを総合的に研究されている坂上委員にお願いしたいと思うが、いかがか。

各委員：異議なし

事務局：ではそのように決定させていただく。

今回は、事務局で作成した中間案を審議いただく。7月中下旬頃に日程調整させていただきます。